

「松永に学ぶ産業と文化」 令和元年度実施報告

共同利用センター 鶴崎 健一

本学では、地域に貢献できる人材を輩出するために、共通教育科目の教養教育科目群として「F群（地域学）」を設置し、平成29年度から「備後に学ぶ地域の課題」という科目を実施している。3年目となる令和元年度の実施内容について報告する。

令和元年度の実施概要

本科目は、福山市経済環境局文化観光振興部文化振興課に協力いただき、「松永はきもの資料館」（あしあとスクエア）を利用した科目で、学生自身で学修課題を考え、調査研究を行うことで地域社会のあり方を考える科目である（参考資料1）。

受講生については、受講説明会（参考資料2）に参加したのは7名であったが、実際に受講を始めたのは4名であった。受講生が少人数であったので鶴崎だけで担当することにした。残念ながら、うち1名は前期終了後に受講を取りやめた。受講生と個別の面談曜日時間を決め、2週間に1回を目安に面談を行うことにした。

受講生4名は、4月20日（土）に「松永はきもの資料館」を見学した。10時に「松永はきもの資料館」に集合し、見学の前に、「松永はきもの資料館」の岡本浩男事務長に「松永はきもの資料館」の成り立ちや展示物の概要について紹介していただいた。その後、館内の見学を行った。

「松永はきもの資料館」見学の翌週から、ほぼ3回の面談で、各学生の学修テーマを絞っていった。

6月から7月にかけては、テーマの絞り込みや見直しをしながら、学生に関連資料の調査をしてもらい、内容のチェックのための面談をほぼ2週間に1度のペースで行った。

前期中にはほぼ調査内容を確定し、8月から9月の夏休み期間中は学生とCerezoで2週間に1度のペースで連絡を取りながら、学修を進めることにした。

9月の後期の初回には、夏休み期間中の調査も含めた中間報告をしてもらった。その内容をもとに、今後の方針について検討し、「松永はきもの資料館」での発表会（12月14日）までに完成する目標を立てた。その後、11月中旬までは、前期同様にほぼ2週間に1度、面談をしながら内容を深めていった。

11月中旬以降は、発表用のパワーポイントのスライドの作成、発表の練習などのため、面談のペースを週に1回に変更し、学生の進展具合によってはさらに頻度を高めて、発表の準備を行った。また、発表会については、公開で行うこととし、大学教育センターの日暮助手の協力で広報用のポスター（参考資料3）を作成し学内への掲示、および、福山市経済環境局文化観光振興部文化振興課、「松永はきもの資料館」の岡本氏の協力で学外にも配布した。

発表会当日は、9時に「松永はきもの資料館」に集合し、10時から参考資料3の順で一人20分程度ずつ学生による発表を行なった。

発表会での質疑応答の結果を受け、1月30日を期限に受講生ごとに最終報告のレポートを作成した。

令和元年度の成果・発表について

「松永はきもの資料館」には、履物以外にも、全国の玩具や松永地域の伝統産業に関する機械などが展示されている。学生が最初に考えたテーマは、1名は下駄に関するもの、1名はヒトの足に関するもの、1名は人形に関するもの、そして、もう1名は玩具に関するものであった。玩具をテーマにした学生は残念ながら上述のように途中で受講を取りやめた。以下に最後まで履修を継続した3名の最終的なテーマと発表概要を以下に示す。

ホモ・サピエンスを見つめる ～自分たちは何者か～ 武田風樹（海洋生物科学科1年）

他の動物と異なり、ヒトは二足歩行を行う特徴を持つ。二足歩行はヒトと近縁の類人猿を分ける頭骨を含めた形態的違いにも関係しているらしい。ヒトに至る種族は約700万年前にアフリカを起源として発生したらしい。初期に発生したオーストラ



写真1 ホモ・サピエンスを見つめる

ロピテクス属の種は100万年前までには絶滅したが、200万年前ごろにはホモ属が発生し今に至る。ホモ属については、進化の過程でホモ・ネアンデルターレンシスをはじめ多くの種が誕生したが、現存するヒト科の生物はホモ・サピエンスだけである。ホモ・サピエンスが生き残ったのかについて多くの説があるがはっきり分らなかった。(写真1)

日本の人形 フランス人形と比較も含めて 林 裕基 (税務会計学科1年)

日本の人形には、それぞれの地域において種類がある。代表的な日本の人形として、御台人形、やまと人形、市松人形、こけし人形、風俗人形などがある。そのうち、市松人形は、江戸時代の歌舞伎役者の佐野川市松に似せた人形として作られ、日本人形の代表的なものである。こけし人形は江戸末期に心身回復と五穀豊穡を願った縁起物として東北地方の温泉地のお土産用に作られた。また、日本の人形は観賞用やおもちゃとして作られたようだが、フランス人形は服の着せ替えをするマネキンとして作られ、裁縫教育に役立つものとして考えられた。(写真2)

日本での人形の歴史
人形は、古くから存在していた。室町時代から公家の子供達の遊びに登場したと言われ、その頃の文獻に「にんぎやう」という語で登場した。江戸時代中期には、一般庶民へと広がった。

日本人形とフランス人形の比較		
	日本人形	フランス人形
服	和服	ドレス
作られた目的	観賞用 おもちゃ	服を着せる マネキン

写真2 日本の人形

日本の下駄 新川哲司 (税務会計学科1年)

下駄は日本で使われてきたはきものであり、木をくり抜いて歯を作り鼻緒をすげたものである。桐下駄、それ以外にも田んぼで利用された田下駄、魚をとるためのネズラ下駄、お茶の葉を刻むための茶切り下駄など、地域や利用目的によって多くの種類の下駄がある。その中で桐下駄の代表的な産地は国内に6つありその内4つの地域の特徴を調べた。一方、福山の松永では桐ではなくアブラギを利用した下駄の産地として有名であった。松永は塩の産地であったが、その塩を運んだ先で積み荷を下ろした空船にアブラギを積み込むことで輸送コストを抑えることで、桐を原料とした物よりも安価な下駄を大量生産したことがわかった。(写真3)

下駄とは？

- ・木をくりぬいて歯を作り、鼻緒をすげた、はき物。
- ・基本的には二枚の歯で作られているものが多いが一枚歯の下駄もある。

松永の下駄とほかの地域の下駄の違い

	松 永	ほかの地域
材料	アブラギ	桐
価格	安い	高い
環境	木材を運搬するための船が頻繁に来ていた	桐材の集積場・集散地があった

写真3 日本の下駄

発表会(写真4)には、鶴崎のほか、大学教育センター長の犬塚教授、中尾教授、竹盛准教授、津田講師および日暮助手、そして、福山市から企画政策課、環境保全課の方にも参加いただき、約10名に聴講いただいた。今回の発表会は、昨年に引き続き「備後に学ぶ地域の課題」の成果発表と同時に行った。各発表の後に質問時間を設けたが、学生同士、あるいは参加された皆さまから質問やコメントも積極的にいただき、少人数での発表ではあったが、活発な議論ができたと考えている。最後には、大学教育センター長でもいらっしゃる犬塚福山大学副学長に講評もいただいた(写真5)。



写真4「松永はきもの資料館」での研究発表

今後の課題

残念ながら、昨年までと同様、今年度も受講生が4名（最終的には3名）と少なく、教養科目としては寂しい結果となった。一方で、昨年はシラバス等を確認して事前面談に来て受講を決めたのは3名のうち1名のみで、2名は別な科目を履修予定であったのだが授業内容を説明することで変更してもらった形での履修であった。それに対して今年度は全員がシラバスに記載した手続きに従って事前面談に参加し、履修を決めた。少しずつ本科目が本学の履修科目として認知されてきたものと考えたい。来年度以降も、学修したいと思う受講生が増えるように、学生個人々の状況を加味しながら、指導内容を検討していきたい。

また、この科目は、学生自身で主体的に学修を進めていくことが重要であるため、特に8月から9月の夏休み期間中に調査研究を進めてもらった。学生には2週間に1回程度、進展具合についてCerezoで連絡するよう伝えていたのだが、今年度は、履修を継続した3名のうち2名は定期的に報告があり進捗の速度は遅かったものの着実に学修が進んだと思われる。今後も学生の自主性を尊重しながら、適切に学修が進むような方法を探りたい。

一方、昨年同様、通常的面談日には体調不良等がない限りは全員出席し、各自しっかりと課題を持って調査を進めていた。受講生の興味関心は活かせたと思うが、昨年に比べると新たな発見や発想は少なく、若干寂しい成果発表となった。来年度以降、資料の検索方法の指導の徹底など工夫していきたい。

令和元度は、福山市経済環境局文化観光振興部文化振興課の協力と「松永はきもの資料館」（あしあとスクエア）事務長の岡本浩男氏のご協力によって、無事に授業を展開することができた。令和2年度も上記のような課題を改善しながら、より充実した授業内容を目指し、学生の地域貢献の意識を高める一助となるようにしたい。



写真5 大塚副学長による講評

(参考資料1) シラバスの概要

講義名	松永に学ぶ産業と文化		
開講期・曜日・時限	通年・集中講義扱い	単位数	2単位
授業のねらい、概要	松永の「松永はきもの資料館」（あしあとスクエア）には、世界中のはきものを始め、地域の伝統産業に関わるものや文化に関するものが展示されています。この資料館を見学することで、産業の栄枯盛衰、文化の継承など、様々な観点から地域について学ぶことができます。そこで、この資料館の見学を通じて、学修者自身の観点で地域の産業や文化について考えてもらいます。		
授業（学修）の到達目標	地域の産業や文化について自身で課題を考え、調査研究することで、地域社会のあり方を考えることができることを目指します。また、その成果をもとに、地域を育み、地域に貢献する精神を身に付けることを目指します。また、学修を通じて、コミュニケーション能力を身に付けることも目指します。		

(参考資料2) 授業日程と実施内容

日程	内容	実施概要
4月10日～17日	受講説明会	期間中の昼休み時間中に、学修支援相談室にて、受講について（「松永はきもの資料館」見学会、日程など）の説明を行う
4月20日	「松永はきもの資料館」見学会	実施場所：「松永はきもの資料館」（説明者：「松永はきもの資料館」事務長） 実施時間：10時～12時（以降は、自由に観覧） 実施内容：「松永はきもの資料館」展示物の見学
4月10日～28日	担当教員の決定 面談日程の決定	受講人数で担当教員を決定（今年度は3名の受講のため鶴崎のみ） 担当教員と面談日程（曜日時限）を決定
5月～6月	テーマの決定 調査研究の準備	担当教員と2～3回の面談を行い、相談の上、決定 資料集めの方法など、調査研究の方法について担当教員と検討
6月～9月	調査研究	テーマに沿って、「松永はきもの資料館」などの見学、資料の閲覧、現地調査などを行い、各自で学修を進める 6月～7月：担当教員に定期的な報告を行い、調査について指導を受ける

		8月～9月（夏休み期間中）：各自で調査研究を進める
9月下旬 ～10月初旬	中間報告 調査研究内容の再 検討	この時点までの調査研究内容をまとめ、担当教員に中間報告する 担当教員と相談しながら、残りの期間で調査研究する内容についての目標 を定める
10月中旬 ～11月中旬	調査研究	再検討の結果を受け、各自で学修を進める 定められた面談日程に従って、担当教員に定期的な報告を行い、調査内容に ついて指導を受ける
11月中旬 ～12月中旬	スライドの作成	調査研究の結果から、プレゼンテーション用のパワーポイントスライドを 作成する
12月14日	プレゼンテーショ ン	「松永はきもの資料館」にて、パワーポイントによる発表を行う 一般にも公開し、意見を仰ぐ
12月下旬 ～1月末	レポートの作成	プレゼンテーション時の質疑を反映させて、必要なら追加の調査を行い、レ ポートを作成
1月30日 (締め切り)	レポートの提出	完成したレポートを担当教員に提出

「松永に学ぶ産業と文化」 「備後に学ぶ地域の課題」 成果発表会

共通教育科目（教養科目 F 群 地域学）「松永に学ぶ産業と文化」と「備後に学ぶ地域の課題」の受講生による成果発表を松永はきもの資料館（あしあとスクエア）で行います。是非、聴講にお越しください。

学生、教職員は**入館無料**です（入館の際に、学生証または教職員証を提示してください）。

場 所： 松永はきもの資料館（あしあとスクエア）

日 時： 令和元年12月14日（土）10:00～



タイムテーブル

10:00 開会あいさつ

10:05 成果発表「松永に学ぶ産業と文化」

▽ ホモ・サピエンスを見つける 武田風樹(海洋生物科学科1年)

▽ 人形について 林 裕基(税務会計学科1年)

▽ 日本の下駄 新川哲司(税務会計学科1年)

11:10 成果発表「備後に学ぶ地域の課題」（芦田川イメージアップの企画）

▽ 川を使った遊び、清掃 イベント考案班

▽ 芦田川本の作成～芦田川を好きになろう～ チーム：鯛

11:45 講評（はきもの資料館事務長：岡本氏）

12:00 閉会あいさつ

※ 発表題目、順番等の変更の可能性があります



<問い合わせ>

福山大学共同利用センター 鶴崎まで

電話：084-936-2112（内線4317 or 3247 ダイヤルイン）

Mail：k-tsuru@fukuyama-u.ac.jp



(参考資料3) 「松永はきもの資料館」での発表会のチラシ